



Title	並河寒泉『辨怪』翻刻（一）
Author(s)	佐野, 大介
Citation	懷徳堂センター報. 2004, 2004, p. 95-103
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/24357
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

並河寒泉『辨怪』翻刻(一)

佐野 大介

『辨怪』は、並河寒泉が妖怪変化・靈狐憑などの存在を否定することを目的として記した書物である。全体は「辨怪」・「破怪」・「吾庠先哲遺文」の三部より成り、さらに「辨怪」は「辨狐怪」・「辨談怪」・「辨信怪」の三篇、「破怪」は「詰破篇」・「窮破篇」・「自破篇」の三篇より成っている。本稿は、このうち「辨怪」部を翻刻したものである。

「辨狐怪」には、世間が「狐狸妖怪の事、懷徳堂之を辨ずる、明哲遺す無(し)。」と評していたことが記されており、また、寒泉自身も「吾(が)懷徳書堂の學、狐狸雜怪(に)於(て)、寸歩(も)迷(ふ)弗(く)、片言(も)容(る)弗(し)。」としているように、「無鬼論」は、自他共に認める懷徳堂を特徴づける思想の一つであった。『辨怪』は、懷徳堂最末期の教授である寒泉が、その無鬼論をまとめた形で記したものであり、懷徳堂無鬼論の構造や性質をよく示している。また、五井蘭洲・中井竹山・中井履軒・中井蕉園・中井碩果の無鬼論に関する言説や事績も収録していることから、懷徳堂無鬼論の系譜を示した資料としても高い価値を有する。さらに、本稿で底本として用いた大阪大学附属図書館蔵本は、寒泉の自筆本であり、墨にて訓、朱にて点が付されていることから、訓点資料としての価値も有する。

なお、『辨怪』の説明・書誌学的解説としては、矢野野隆男氏「並河寒泉関係資料」(『大阪大学大学院文学研究科紀要 モノグラフ編』第四二巻一、二、

湯浅邦弘編、二〇〇二年)及び『懷徳堂事典』(湯浅邦弘編、大阪大学出版会、二〇〇一年)の「辨怪」の項があり、内容について論じたものとして、陶徳民氏「並河寒泉の社会政治観——『弁怪』と『居諸録』を中心に——」(『日本思想史学』第二〇号、一九八八年、後に『懷徳堂朱子学の研究』(大阪大学出版会、一九九四年)に収録)がある。

凡例

- ・ 本稿は、並河寒泉『辨怪』のうち「辨怪」(「辨狐怪」・「辨談怪」・「辨信怪」)の翻刻である。
- ・ 底本には並河寒泉の自筆本(大阪大学附属図書館蔵)を用いた。
- ・ 底本にはかなりの俗字・或字が使用されているが、印刷の都合上、原則として全て正字に改めた。
- ・ 底本の訓点資料としての価値に鑑み、訓点も翻刻した。
- ・ 訓点は底本の形にできるかぎり忠実に従った。なお、上下点のうち、下点のみが付されており対応する上点を欠くなど、点を脱することが明らかな箇所も底本のままとした。送りがないの、「子」(ネ)・「一」(く)「おどり字」(「^レ」(して・しめ))についても底本の表記に従った。
- ・ 底本には、挿入の印として字間に朱で「○」を附加し、上部欄外に文字を記した箇所があるが、その文字は文字囲いにより示した。

・ 空格は「□」で示した。

・ 底本では分節していないが、通読の便のため一文を幾つかの節に分けた。
・ 一部語句には、注として出典と思われる箇所を示した。

※なお、訓点の特徴として、

・ 「ゝ」は一音の繰り返しを示す(例:「此、ゝ」||「ここに」など)。

・ 「く」(おどり字)は漢字もしくは二音の繰り返しを示す(例:「唯く」

||「ただただ」など)。

・ 「焉」が目的語となる場合は、かりがね点を省略する(例:「見焉」

||「焉を見る」など)。

などが見られる。

辨怪

大坂府學教授並河朋來亭先甫 撰

辨狐怪

泉州界府ノ商翁、有祀_下稻祠_ヲ於家_ニ者、翁疾_ム、一日
會_ニ親戚_ヲ曰、身_ハ是_レ家祠_ノ靈狐也、主翁崇奉之厚_キ、神
爲_ニ來報_{スル}也、神聞_ク汝等於_ニ翁_ニ、交誼太_タ疏、主翁今
日之疾、職_ハ此_レ之由、汝等自_レ今賑卹以睦_{セハ}、則翁_ノ
疾可_レ瘥_エ矣、乃令_ニ連署以誓_一焉、府_ノ衛曹某聞_レ之_ヲ、

佛然攘_{ケテ}臂_ヲ曰、何_ニ等_ノ愚老、妖誕敢爾_ル、我其_レ發摘
服_レ之_ヲ、弗_レ服_セ則身首萬段、擇_ニ取_リ銳刀_ヲ、奮然而
往、翁見_レ某則即指_ニ其佩刀_ヲ曰、拙_シ矣更也、何_ヲ擇_ニ
於刀_ニ、此欲_ニ以武屈_セ予_ヲ也_ル與、某愕眙_ニ憚然而去_、
翁又嘗言、不_レ識_ル字_ヲ者、不_レ足_ニ與_ニ語_ニ、唯_ク讀書之人
可_キ與_ニ語_ニ已、有_ニ一學醫_一往_ク、叩_ニ和漢史上_ノ事_ヲ、翁
應答如_レ響、或指_ニ言_フ其紙數_、醫驚服而去、一學士
以_ニ斯_ノ話_ヲ語_ニ森孟宜_ニ、且曰、狐狸妖怪之事、懷德堂
辨_レ之_ヲ、明晰無_レ遺、我_モ亦學_ニ程朱_一者、則不_ニ敢惑_一
也、然_ニ聽_ニ之_ヲ於忠直之口_ニ、其惑_ヒ有_ニ未_ニ釋然_一者_上、
今也斯_ノ話、親聽_ニ諸_ヲ界府_ノ某_ニ、某也忠直不_ニ敢惑_一
者、而面_{アタリ}視_テ談_ス之_ヲ、是_ニ吾_カ惑_ヒ之所_ニ未_ニ釋然_一也、
請質_ニ諸_ヲ並河教授_ニ、孟宜以告、予危坐正_レ襟_ヲ曰、
夫_ノ爲_ニ學_ヲ之務、以_レ解_ニ惑_ヲ爲_ニ要_一、況_ヤ師_ニ於人_ニ者_ヲ
乎、己_レ之惑_ヒ且不_レ解_ケ、何_ヲ以解_ニ人_ノ惑_ヲ、書_ニ不_レ云_ハ乎、
人_ハ是_ニ萬物之靈_ニ、既_ニ是_ニ萬物之靈_ニ、狐狸微獸何_ヲ爲_ニ、

爲^レ學^ヲ者、苟^モ存^ス心^ヲ於^ニ此^ニ、雖^レ有^ニ百怪談^一、復奚[、]
惑^シ、夫[、]何[、]信^ニ於^ニ忠直^ニ乎、豈[、]唯[、]忠直[、]雖^ニ君子者^一、
予^ハ則^レ不^ル信也、程子辨^{スル}怪^ヲ之言^ニ曰[、]於^ニ事上^ニ一々理^一
會^{セハ}、則^レ有^ニ甚^ニ盡^ル期^一、須[、]只[、]於^ニ學上^ニ理會^ス、今也[、]
斯^ノ談[、]妄誕^{不經}不^ル足^ニ辨^{スル}、固[、]也、然[、]言^ハ欲^ト質^{サント}
之^ヲ予^ニ、則^レ予^ハ不^ル必^{スル}律^{スル}以^ニ程子之言^ヲ也、能^ク言^テ辨^{スル}
妖怪^一者、亦[、]聖之徒與、予^ハ何[、]辭^{セシ}、請[、]備^{サニ}辨^{セシ}之^ヲ、

※書不云乎 「惟天地、萬物父母。惟人、萬物之靈。」《尚書》「泰誓」
※程子辨怪之言 「今日雜信鬼怪異說者、只是不先燭理。若於事上
一一理會、則有甚盡期、須只於學上理會。」《河南程氏外書》「附東
見錄後」

以^レ予^ヲ觀^レ之^ヲ、斯^ノ翁姦黠可^レ憎^ム之^キ甚^キ者、阿紫何[、]知[、]
蓋始^レ之^ヲ以^ニ妖謀^ヲ、終^レ之^ヲ以^ニ愚弄^ヲ、而一窮病實^ニ爲^リ
其^ノ欄柄、翁之窮病、欲^{スル}仰^ニ給^ヲ于親戚^ニ者久、而計^一
無^キ所[、]出也、幸^ニ族人皆俗徒、狐妖、詐謀、於^ニ是^ニ乎^一
出、乃知^レ非^ニ狐附^{クニ}翁^ニ、是^ニ翁附^レ狐^ニ矣、是^ニ非^ニ始^{ルニ}

之^ヲ以^ニ妖謀^ヲ乎、族人既^ニ受^レ誓^ヲ、狐之能事畢^ル、妖謀^一
無^キ復[、]所用^ル也、會[、]有[、]不^ル招^レ之客二人來、翁黠瞳一
注、即[、]謂^フ此^ノ徒^モ亦[、]易^キ與[、]耳、妖謀餘焰、可^ニ以^ニ薰灼^一
矣、於^ニ是^ニ乎^一或指^レ刀^ヲ或論^シ史^ヲ、準[、]的[、]皆得^ル、二客茫
乎心醉、猶[、]鯽魚之於^ニ灰汁^ニ也、其妖謀足^ニ益[、]取^ニ信^ヲ
矣、是^ニ非^ニ終^{ルニ}之^ヲ以^ニ愚弄^ヲ乎、嗚呼一時^ノ妖謀、始^一
終圓備、其姦詐周^{チシ}矣、可^レ憎^ム之^キ甚^キ、是假^リ鬼神^ヲ惑^ス
人^ヲ之徒也、罪不^レ容^レ誅^ニ、夫[、]某氏、忠直其性也、不^ル
敢[、]惑^一者、恐^{クハ}此^レ客氣、而其中[、]心^ハ則[、]信疑相半^{ハスル}者也、
以^ニ其忠直客氣^ヲ、與^ニ彼^レ姦黠妖謀^ヲ、相比^シ以^ニ鬪^一、其
強弱胡[、]止[、]一着、彼乘^{スルニ}以^ニ狐妖之詐謀^ヲ、此挾^{ムニ}
以^ニ信疑之客氣^ヲ、一場^ノ對戰、片言未[、]接^セ、遽然遇^ニ
指^レ刀^ヲ之一喝^ニ、頓^ニ挫^キ其^ノ鋒^ヲ、客氣忽摧敗^ス、疑鋒
鈍^{フリ}、而信鋒磨^シ、卒^ニ爲^ニ城下之盟^ヲ矣、於^ニ是^ニ一團^ノ客
氣、既^ニ已^ニ消沮^ス、滿腹所[、]存^{スル}、只[、]是^ニ一條^ノ忠直而已^一
矣、宜[、]其信^{スル}之^ヲ之益[、]固[、]何[、]不[、]敢惑^一之有[、]若[、]夫[、]

指^レ刀^ヲ論^{スル}史^ヲ之事、細^ニ察^{セハ}其情與^ヲ言、則可^キ知^レ己、某氏^ハ、衛曹之武人也、武人而奮然攘^ケ臂^ヲ往^ク者、豈^ニ徒^ニ哉、擇^レ刀^ヲ之情、盎々乎面目呈露^{スル}者、可^ニ想見^ス己、况^ヤ翁之姦黠瞳彩、爛然注射^{スル}者乎、其論^{スル}史^ヲ也、翁素^{ヨリ}有^ニ此伎倆^一、而常^ニ深^ク蔽藏^{スル}也、商人嗜^ム書^ヲ者、往々有^ニ然者^一也、今也欲^シ鼓^{セシ}狐術^ヲ、却^テ露^ニ其尾^ヲ、乃曰、讀書之人、可^ニ與^ニ語^一、是翁所^ニ自言^{スル}、伎倆有^ル素、昭々可^レ徵^ス矣、復奚^ソ異^シ、抑^ク斯^ノ二者、適^ニ足^ニ以^ニ鼓^ス舞^{スル}其妖謀^ヲ也、則斯^ノ二客^ノ者、不^レ知^レ不^レ識、入^ニ其殼中^ニ也、豈翅^ク二客^ノ斯、學士亦殆^モ乎將^ル入^ニ其殼中^ニ也與、予^{レハ}則鳴鏑^一注^ス、欲^ス以厭^ニ勝^{セント}妖翁之狐魅^ヲ也、

※城下之盟 敗戦後に結ばされる屈辱的な講和。「大敗之、爲城下之盟而還。」(『春秋左氏傳』桓公十二年)、「城下盟、諸侯所深恥者也。」(同杜注)

辨^ス談^{スル}怪^ヲ

既^ニ爲^ニ學士^ノ、著^ニ狐怪之辨^ヲ、而餘意猶欲然、覺癢處手末^ヲ及也、乃轉^シ舵溯^リ源^ニ、辨^ス世人談^シ怪^ヲ信^ス怪^ヲ、兩弊有^ニ所^ニ由^テ來^一、分爲^ニ二篇^一、以付^ニ其後^ニ、庶幾^{クハ}有^ニ補^ニ於^ニ提^ニ醒^{スル}世之惑夢^ヲ云、吾嘗聞^レ之、見^テ怪^キ不^レ怪^マ、怪^キ自^ラ壞^{フル}、蓋見^ヲ爲^ニ而怪^ム者、十之九、見^モ焉亦不^レ怪^マ者、厖々居^ニ其^一、是談^{スル}怪^ヲ之頑弊、所^ニ由^テ來^一也、夫、怯夫之瞳、怪^{メハ}則頽然長和尙矣、不^レ怪^マ則圓首長燈耳、凡^ソ世之談^{スル}怪^ヲ者、靡^ハ如^ク親^ク見^カ之然^リ、叩^{ケハ}之則皆得^ニ諸^ヲ傳聞^ニ者也、詰^ニ其所^ニ由^テ來^一、則虛誕已、或有^ニ言^ニ親^ク見^ト之者、窮^{レハ}之則亦猶圓首長燈也、程子所謂^フ目病、是已、此見焉而怪^ム者也、其怪^ム之者、既^ニ目怪^ミ之、又心信^シ之、而又口鼓^シ之、以吐^ニ之於衆人之耳^ニ、是談^{スル}怪^ヲ之弊所^ニ由^テ起^一也、其聞^レ之者、左聲尙在^リ耳^ニ、既^ニ口吐^ニ之

右^ニ、一左一右之間、談脉漸^ク浮大、寸而尺、尺而丈、緣飾簸弄、終^ニ至^ニ說^テ箸^ヲ爲^ル棒^ト也、於是^ニ談^{スル}怪^ヲ之弊、頑然而成、無^レ他由^ル聞^キ焉而怪^ム也、然^{ラハ}則見^ヲ而談^{スル}者、既^ニ已^ニ自惑^ヒ、又惑^{ハス}人^ヲ、其罪有餘、聞^キ焉而談^{スル}者、緣飾簸弄、其罪殆^{シト}有^ニ甚^キ焉者、可^レ不^ル慎^ム乎、若^シ夫^ノ見^モ焉亦不^ル怪^マ者、目且不怪^マ、矧^ヤ心口^ヲ乎、要在^ニ見聞兩^{ナカラ}不^ル怪^マ耳、不^レ怪^マ則已^ム、既^ニ怪^{メハ}則宜^ニ窮^メ而破^ル之^ヲ矣、既^ニ破^ル之^ヲ、談^{スルモ}亦有所^レ辨^{スル}焉、何^ソ言^ン談^ス怪^ヲ、人^リ而如此、怪談或可^ニ默消^ス焉、

※程氏所謂目病 「假使實所聞見、亦未足信、或是心病、或是目病。」
『河南程氏外書』〔附東見錄後〕

或^人曰、見^ヲ焉而怪^ム者、如何^シ而怪^ム、曰迎^{フル}之^ヲ也、曰見^モ焉亦不^ル怪^マ者、如何^シ而不^ル怪^マ、曰不^ル迎^ヘ也、曰迎^{フル}與^レ不^ル迎^ヘ之形、何^ヲ以言^フ之^ヲ、曰其迎^{フル}之^ヲ也、猶痴僧之蹂^ム蟻^ヲ也、其不^ル迎^ヘ也、猶舜水之遇^ニ刃客^ニ也、有

僧夜^ル步^ス庭^ニ、暗中踐^ム物^ヲ、履底軟潰^ス、以爲^ニ蹂^ム殺^{スト}蟻^一也、恨悔弗^レ措^カ、已^ニ寢^ス、蟻來^リ訴^ヘ冤^ヲ、憤恨說^キ盡^{クス}、僧懇謝^シ不^レ已^マ、夢覺^ム、汗透^ル衣背^ニ、待^チ明^ヲ往^キ弔^{スレハ}、則腐茄也、朱舜水之在^ニ江都^ニ也、昏夜雨^ニ行^ク、有^レ物、突^ニ擊^ス其傘^ヲ、舜水歛^テ傘^ヲ而視、不^レ見^ヘ、從容擊^テ傘^ヲ行^ク、又擊[、]亦如^レ初[、]再三而後止^ム、還^リ家^ニ閱^{ミス}之^ヲ、傘有^ニ劍迹^一者三^ツ、蓋遇^ニ刃者^ニ於衢^ニ也、癡僧、滿腹唯^ク怪[、]腐茄則爲^ル蟻^ト、舜水、滿腹無^レ怪[、]刃^モ亦不^レ怖^レ、嗚呼見^モ焉亦不^ル怪^マ、聞^モ焉亦不^ル怪^マ、斷然自破^ル之^ヲ者、天下能^ク幾人、

辨^ス信^ス怪^ヲ

天地之道唯^ク至誠矣、無^キ可^レ容^ル妖怪虛誕^ヲ也、戴^キ其天^ヲ履^ミ其地^ヲ、以成^ニ其誠^一者、人之道也、其方寸間、復奚^ソ容^{レン}妖怪虛誕^ヲ哉、人之爲^ル誠^ヲ、雖^レ有^ニ淺深厚薄^一之不同[、]也、天下億兆之衆、其孰^レ不^レ由^ニ斯[、]

道^ニ、孝弟忠信之事^{フル}人^ニ、稼穡販粥之治^{ムル}業^ヲ、饑^{ユル}之思^ヒ食^ヲ、渴^ク之呼^ビ飲^ヲ、熱^シ而葛^シ、寒^ク而袍^シ、喜^ハ則^チ笑^ヒ、憂^レ則^チ悲^ム、莫^キ適^キ而非^ル誠^ニ也、然^リ而其方寸間、信^{スル}妖怪虛誕^ヲ者、獨何^ソ與、是無^レ他^ニ也、誠失^ヒ其養^ヲ、而腐敗以出^ル也、性之善也、失^ハ其養^ヲ則腐德矣、仁之腐也貪、義之腐也戾、禮之腐也奢、智之腐也姦、程子所謂^フ、惡亦不可^レ不^ル謂^フ性^ト、是也、誠之腐敗^モ、亦猶是^レ也、然^{ラハ}則誠之腐敗、何^ニ者^カ使之^ニ然^ニ、曰^ハ妄也、凡^ソ養誠^ヲ之要、用^{ユル}之幼稚^ノ日^ニ、其功大^ニ多^ニ、但^ク妄以養^ハ之^ヲ則腐壞^ス、衆庶億兆之信^{スル}怪^ヲ、亦是^レ妄已、蓋厭^ヒ正^ヲ喜^フ奇^ヲ、世之頑習、先^ニ入爲^ル主^ト、人之常情、當^リ其稚心蒙昧之日^ニ、既^ニ進^ル之以^ス狐狸雜怪之妄^ヲ、喜^ハ則戲^ル之以^ス狐狸^ヲ、啼^{ケハ}則威^ス之以^ス狐狸^ヲ、笑^{フモ}亦狐狸、怒^{ルモ}亦狐狸、起臥行住、莫^キ非^ル狐狸^ニ也、銘^{スル}之以^ス喜^フ奇^ヲ之習^ヲ、錮^{スル}之以^ス先入之情^ヲ、於是^ニ乎癡嬌腸內、既^ニ胎^ニ棲^ス一

狐狸^ヲ焉、幽室昏庭、怯腫所^レ炤^{ラス}、其赤^シ匪^ル狐^ニ、莫^シ黑^ノ匪^ル狸^ニ、怯膽稚子、得^レ不^ル信^シ且怖^レ乎、信怖之腐誠、於^レ此^ニ乎熟^ス、是^レ謂^ニ妄以養^ト也、宜^ハ乎幼稚之日、而眞誠卒^ニ腐敗^ス矣、及^ニ其長^{スル}也、煽^ク之以^ス厲鬼夜叉之妄^ヲ、鼓^{スル}之以^ス天狗飛頭之誕^ヲ、則夫^ノ喜奇之習^ヒ、先入之情、與^ニ信怖之腐誠^ニ、又滋^ク熟^ス、至^リ老^ニ竟^ニ爲^ニ沈痼^ト、不可^レ復救^ヒ藥^{リス}矣、嗚呼哀哉、衆庶億兆之信^{スル}怪^ヲ、其本源實^ニ在^ニ于此^ニ、矣、自^レ非^ル拔^キ其本^ヲ清^{スル}其源^ヲ、斯^ノ病何^ソ瘥^フ、

※方寸間 「既而曰、噫、吾見子之心矣。方寸之地虛矣。」（『列子』仲尼）
※程子所謂 「有自幼而善、有自幼而惡。是氣稟有然也。善固性也、然惡亦不可不謂之性也。」（『河南程氏遺書』「端伯傳師說」）

衆庶億兆、少^ニ長^{スル}于怪誕之間^ニ者、姑^ク舍^フ旃^ヲ、夫^ノ以儒^ヲ命^{スル}家^ニ者、其所^ハ學^ハ則鄒魯正經、其所^ハ由^ハ則洛閩宗學、日夕所^レ求、莫^キ非^ル養誠^ヲ之事^ニ也、則拔^キ本^ヲ清^{スル}源^ヲ之要、將^ニ於^レ此^ニ乎在^ニ、然^ニ至^{レハ}於信^{スル}怪^ヲ、

則亦猶不^レ異^{ナラ}於衆庶億兆^ニ矣、是可^レ怪^ム之甚^キ者、其諷^{スル}書^ヲ也、魯經^ハ則有^ニ四十不惑^ニ、及不^レ語^ル怪焉、鄒經^ハ則有^ニ不動^レ心、與^レ養^ス氣焉、是皆養誠^ヲ之教也、則延^キ徒聚^メ生^ヲ、稠人廣坐、說^ニ與^シ之^ヲ、而及^ニ其燕居談笑^ニ、則語^リ狐狸雜怪^ヲ、喜意得^ル然、覲^ト不^レ搖^レ鼻端^ヲ、鼓^シ舌^ヲ詡談^シ、又從^ヒ而怖^ル之^ヲ、自旁觀^レ之^ヲ、其顏容蚩^リ、不^レ異^{ナラ}於癡人說^ニ夢^ヲ、與平素說^レ經^ヲ、判^ト若^ニ兩人^ノ、其矛盾支吾、何^ソ一^ニ至此^ニ、是知^ル其日夕養^レ誠^ヲ之學、亦從^ヒ而腐敗^{スル}也、已、凡^ソ讀書之人、自衆庶億兆^ニ觀^レ之^ヲ、則瞻仰以爲^レ賢^ト爲^ニ斗山^ト、片言隻辭^モ、亦皆信^ス之^ヲ、況老師宿儒^ヲ乎、然^リ而其人若^レ此、是播^{コス}腐誠^ヲ於衆庶億兆^ニ也、妄^モ亦大^ニ甚^シ、拔^キ本清^{スル}源^ヲ之要、其安^{クニ}在哉、嗟夫、九原可^レ起^ス、鄒魯^ノ兩夫子、其謂^レ之^ヲ何^ト、可不^レ慚^チ且懼^レ乎哉、

※四十不惑 「四十而不惑」(『論語』爲政)

※不語怪 「子不語、怪力亂神。」(『論語』述而)

※不動心 「孟子曰、否、我四十不動心。」(『孟子』公孫丑上)

※養氣 「我善養吾浩然之氣。」(『孟子』公孫丑上) など。

※九原可起 死者を起こすこと。「九原」は墓地の意。「晉卿大夫之墓

地在九原」(『禮記』檀弓下「以從先大夫於九京也」鄭注)

然^ラ則拔^キ本清^{スル}源^ヲ之要、卒^ニ不^レ可^レ得^ル與、曰、否^リ、先^ツ自^レ隗始^{メシ}、吾懷德書堂之學、於^ニ狐狸雜怪^ヲ、寸步弗^レ迷、片言弗^レ容、衆楚人咻^{フス}之^ヲ、褻^ト如^ニ充耳^ノ、觀^ニ世之信^{スル}怪^ヲ者、實^ニ不^レ勝^ヘ恨嘆^ニ、吾^カ庠^ノ先修發^シ憤^ヲ乎此^ニ、勃然曰、童牛可^ニ以^ス告^ス矣、文王之政、且自^ス寡妻兄弟^ノ、乃恆^ニ戒^テ家人^ヲ曰、爲^ニ子兒者^ノ、啼笑喜怒、勿^レ乘^{スルニ}以^{スル}狐狸雜怪^ヲ、必欲^ス懲^ニ艾^{セント}其啼怒^ヲ、宜^ニ言^ニ父母其呵責^{スト}、亦足^ニ以^ス誨^{ルニ}兒^ヲ矣、汝等其戒^ヨ之^ヲ、是、以^テ閨閣之內、老少婦女、羞^チ談^ニ狐狸^ヲ、少角童孺、嗤^{ケル}說^{クヲ}厲鬼天狗^ヲ、矧^ヤ巫覡符章^ヲ絶^ニ於言議^ニ乎、顔之推先^ツ獲^ニ我心^ヲ者也、內庭且然^リ、況^ヤ外舍問^レ業者^ヲ乎、庠之内外靡然成^ニ斯^ノ風^ヲ、百^ニ有^一餘

年于今^ニ矣、則拔^キ本^ヲ清^フ源^ヲ之要、庶^イ乎弗^レ畔^カ矣、
 本源已^ニ拔清^ス、養^レ誠^ヲ之教、隱然存^ス焉、斯^ノ風業^一已^ニ
 試^ニ之^ヲ家^ニ、兆^一可^ニ以行^一、舉^ケ而錯^ク之^ヲ、家倣^ヒ戶慣^ヒ、
 推^シ而國、而天下、衆庶億兆、豈不^ニ靡然成^レ風^ヲ乎、
 斯^ノ民也、礪^{*}廬已^一降、所^ニ以直道而行^一也、斯^ノ風也、
 果^レ遍^ツ布^シ乎、普^ク大率^ス土、雖^モ復^シ欲^シ容^シ妖怪虛誕^ヲ、得^シ
 乎、則衆庶億兆、方寸間一塊^ノ腐誠、化^シ而爲^ル眞^ト、所^レ
 謂^フ自明^カ而誠^{ナル}者有^リ焉、抑^ク家倣^ヒ戶慣^フ之教、誰^カ
 其^レ尸^{トル}之^ヲ、豈有^シ他哉、以^レ儒^ヲ命^{スル}家^ニ者、在^ニ先^ツ自^ラ
 爲^ル之^ヲ也、今也國家文教之治、以^レ儒^ヲ命^{スル}家^ニ者、府^レ
 下比屋相接、經史之業、日出^テ而作^シ、日入^リ而息^フ、是^レ
 誰^ノ之澤^ソ與、微衷當^キ欲^ニ以添^ニ涓滴^ヲ於河海^ニ耳、何^ソ止^ク
 餬口^ノ一路而然^{ラン}哉、然^ラ則晨諷夕誦、何^ノ爲^メ也、修^ル
^レ己^ヲ也、治^ル人^ヲ也、所^ニ以養^レ誠^ヲ也、所^ニ以裨^ニ補^{スル}文^一
 教^ヲ也、於是^ニ儒名始^テ可^ニ以命^ス家^ニ矣、衆庶億兆、可^ニ
 以矜^ス式^ス矣、然^ル後其教以成^ル、吾^カ庠^ノ之設、最可^ニ以裨^ニ

補^ス口國家^ノ文教^ニ者、是^ヲ、以^カ吾^ノ先修奉^シ其德意^ヲ、欲^{スル}
 揭^ケ正學^ヲ以養^ニ斯^ノ誠^ヲ也、今也鳳來、淺學固陋不^ニ自^ラ
 揣^{カラ}、兼^ニ乏^キ教授^ニ、狗^ニ續^{スレハ}其緒^ヲ、則不^ニ敢失^レ墜^セ
 先志^ヲ、欲^ニ以自^ラ修^メ治^{ント}人^ヲ也、若^キ此^ノ篇^ノ、不^レ厭^ニ
 呶^リ、紙盡^キ而筆不^レ休^セ者、亦唯^ク冀^フ有^リ裨^ニ補^ス於口
 國家^ノ文教^ニ耳、若^シ夫^ノ鄒魯洛閩之學、豈敢言^レ得^ト焉、
 但^ク既^ニ已^ニ以^レ儒^ヲ命^{スレハ}家^ニ、則辨怪^ノ一事、雖^レ不^レ足^レ
 使^ル衆庶億兆^ニ倣^セ、所^レ異^{ナル}於衆庶億兆^ニ者、則^レ
 髣髴^乎有^ト得^フ云^フ爾^ミ、

※衆楚人咻之 環境の影響が大きいことのとえ。「一齊人傳之、衆楚人咻之、雖日撻而求其齊也、不可得矣。」(『孟子』滕文公下)

※褒如充耳 「褒如充耳」(『毛詩』邶風、旄丘)「箋云、充耳塞耳也。言衛之諸臣顔色、褒然如見塞耳無聞知也。人之耳聾恒多笑而已。」(同鄭箋)、「褒多笑貌。充耳塞耳也。」(同『詩集傳』)

※文王之政 「刑于寡妻、至于兄弟、以御于家邦。」(『毛詩』大雅、思齊)

※山角 男の子の髪型。「少」とは左。三月之末、擇日剪髮爲髻、男角女髻、否則男左女右(傍点引用者)。(『禮記』内則)

※顔之推云云 『顏氏家訓』教子第二や、「吾家巫覡禱請、絕於言議、符書章醮亦無所焉、並汝曹所見也。勿爲妖妄之費。」(『顏氏家訓』治

家第五)などを指したもののか。

※礮廬 「礮取^{おのころじま}廬島」の略。「其矛鋒滴瀝之潮、凝成一嶋、名之曰礮取廬島。」(『日本書紀』卷一、神代上)

※一箇所「國家」の上の空格を欠くところがあるのは、底本では行頭に当たっていたため。

※狗續 つまらぬものが立派なものに続くことのたとえ。「時人爲之諺曰、貂不足、狗尾續。」(『晉書』趙主倫傳)

(本研究科助手)